

学校礼拝としての「み言葉の礼拝 (A Service of the Word)」

市 原 信太郎

はじめに

すでに述べたように¹⁾、日本のキリスト教主義学校における学校礼拝には特別な意味を見いだすことができる。それは、キリスト教主義学校といえども公教育という枠組みの中ではキリスト教に限定的な地位しか与えることができないという本質的限界性を持つ一方で、個々の学校はそこで行われる礼拝を通して公同の教会とのコミュニオンのうちにあり、それゆえそれぞれの学校におけるすべての出来事を教会の「内」なる出来事として見ることができるということである。キリスト教主義学校は、そこで行われる礼拝を通して、「キリストのからだ」である教会のうちに結び合わされるのである。

してみれば、その学校礼拝は実際にどのように行われるべきであろうかという次なる疑問に我々は直面するのである。

言うまでもなく、学校礼拝はそれを通してキリスト教主義学校を普遍的な教会とのコミュニオンに保つものであるから、「学校礼拝」という特殊なカテゴリーを設定し、教会で行われる礼拝と全く関係ない礼拝を行うという考え方は適切ではないであろう。しかし一方で、日本におけるキリスト教主義学校の学校礼拝は通常の教会で行われる礼拝とは異なる大きな特徴を持つ。それは一つには、参加者のほとんどが教会の信徒であるという意味でのクリスチャンではないことである。このことは、礼拝に参加するモチベーションとも関連しており、多くの場合参加者はいつも高い参加意識を持ってチャペルに足を運ぶわけではない。学校礼拝は、一方では教会の伝統に則しつつも、他方ではこのような参加者の背景を考慮したものでなければならないという、二律背反の条件の下におかれていると言える。

しかし一方で、教会の歴史を考えると、このような状況が必ずしも特殊とは言えないという見方も可能である。教会は、それまで教会がなかつ

た新しい場所に伝道に赴くとき、ほぼ確実にこのような状況の中で礼拝を行ってきたのであり、いわゆる「伝道礼拝」のようなものは古くから行われてきた²⁾。また現代においては、伝統的なキリスト教国といえども社会の世俗化の中にあつて、自分自身が伝道の対象であることを再認識するに至り、種々の新しいアプローチが試みられている。

その一つに、英国教会 (Church of England、以下 CofE) において³⁾1960年代から研究されてきた「み言葉の礼拝 (A Service of the Word)」がある。このような礼拝形式が求められたその背景には、現代社会の中で教会を取り巻く種々の状況に対して礼拝の面から応答しようということがあり、我々が考察しようとしている学校礼拝と共通点を持つ状況下において、教会が提示した一つの解であるといえる。また、この礼拝は従来の教会の礼拝に比較して、非常に柔軟性に富む礼拝であり、この点からも学校礼拝として好ましい特徴を備えていると言える。

本小論においては、まず CofE における「み言葉の礼拝」の歴史とその基本的特徴を概観する。そして、この礼拝形式を学校礼拝として用いるために必要な点を考察し、いくつかの具体的な提案を試みたい。

英国教会における「み言葉の礼拝」

歴史的背景

よく知られるように、聖公会の礼拝の大きな特徴の一つは祈祷書を使用することであり、20世紀に至るまで全世界の聖公会の礼拝の形式は1662年の The Book of Common Prayer (1662BCP) が元になっていたと言ってよい。最初の1549BCPの策定に当たり、クランマー大主教は聖務日課を朝夕の礼拝の二つにまとめた。これらは文字通りの意味で朝夕の礼拝として用いられるだけでなく、聖餐式でない (non-Eucharistic) 礼拝として

も用いられ、特に朝の礼拝は主日（日曜日）の主礼拝として、典型的には朝の礼拝・嘆願・聖餐式前部（Ante-Communion）という形で用いられるようになった。

一方、18世紀以来メソジストの説教中心の礼拝が広く受け入れられ、これに対抗する必要性もCofEには生じていた。そのほか、ピューリタン運動の結果として、み言葉を重視する傾向も生じていた。加えて、19世紀半ばには、教会に行っていない多数の人々へのアプローチの必要性があることを、CofEは統計調査の結果認識していた。この結果として、礼拝面においては朝夕の礼拝の式文を短縮して使用する許可を与える（the 1872 Act of Uniformity Amendment Act）などの方法が考えられてきた。その他、当時盛んになっていた日曜学校の礼拝なども、後述する家族礼拝（全世代礼拝、All-Age Worship）の先駆けと見ることができよう⁴⁾。

現代の英国教会におけるニーズ

「み言葉の礼拝」へのニーズは、歴史的にはこのような背景から生じてきたのであるが、現代のCofEにおいてこの礼拝形式が生み出された理由は、大きく2点において認識されている。すなわち、一つには都市優先地域（Urban Priority Areas、UPA⁵⁾）での教会の働きを捜し求めたこと、またもう一つは家族礼拝（Family Services）の必要性に迫られたことである⁶⁾。

1985年、英国教会は『都市における信仰（Faith in the City）』を刊行し、その中でUPAに関する問題を論じた。この文書において、UPAはその置かれている状況から通常のバリッシュチャーチと同様のアプローチをすることが必然的に困難であり、従ってそこにおける礼拝については「民衆が福音に耳を傾け、理解することができるように、民衆の言葉を語るものでなければならず、その礼拝は地域文化から生じ、地域文化を反映したものでなければならない」と述べられている。そして、それは使用される言葉やスタイルや内容をよりインフォーマルで柔軟性に富んだものとするであろうから、それゆえに地域によるバリエーションを含んだ形での一般的な形式を提供し、地域性に富んだ礼拝のための余地が豊富に許されて

いるものとなるであろうとその方針を提示し、このような礼拝は抽象的で理論的であるよりも、具体的で形のあるものとなることによって、民衆の参加を促し、地域における民衆の関心事を反映したものとなるであろうと語られている⁷⁾。

もう一つの動きとして、家族礼拝（Family Service）の実践が広く行われていたことがある。英国は日曜学校運動の発祥の地であるが、1950年代以降日曜学校への出席者が目に見えて減少し、この年代への働きかけの必要性が認識された。その結果として、家族的礼拝という考え方が生まれ、多くのバリッシュで月1回程度の家族礼拝を行うという実践が一般化した⁸⁾。すなわち、この礼拝においては大人と子どもが共に礼拝に参加することが重要となり、そのための式文が求められることとなった。

「み言葉の礼拝」の誕生

このようなニーズを背景として、CofEの礼拝委員会（Liturgical Commission）は『礼拝の諸様式（Patterns for Worship⁹⁾』（以下PW）を1989年に発行した。これは通常の祈祷書とは様相を異にし、礼拝の基本的な構造に関する手引きに続き、その構造に従って用いることのできるリソースをセクション毎に分類して配置し、それらを具体的な礼拝の形で用いるためのサンプル集が配置されているものであった。この式文は、単に「み言葉の礼拝」のみならず、聖餐式文としても用いることを意図しており、そのために主教会は受容のプロセスとしての期間を取ることとし、本格的な出版については慎重な姿勢を見せたため、1995年になってようやく、商業出版物として日の目を見ることとなった。

「み言葉の礼拝」は、2000年に刊行されたCofEの新しい祈祷書である*Common Worship*（以下CW）にも納められた¹⁰⁾が、「式文」本体はわずか1ページの構造の指示に過ぎず、これに対する「手引き」と「注」とが合わせて収録されている。礼拝に必要なリソースは、祈祷書の中のさまざまな部分から拾い出してきて用いるわけである。この式文は、礼拝を構造としてとらえ、その各要素について必須のものとオプションなものに分けて扱うという点において、聖公会の礼拝式文史

上画期的なものであったということができよう。

*CW*の発刊後、*PW*は*New Patterns for Worship*(以下*NPW*)として2002年に改定され、*CW*の補足的な性格を明確にするものとなった。

「み言葉の礼拝」の式次第

さて、*CW*や*NPW*に収録されている「み言葉の礼拝」の式次第について、概略を見ておくこととしよう¹¹⁾。以下が、式次第の全訳である。

序式 (Preparation)

- 司式者は、招きの言葉 (Greeting) を用いて会衆を迎え入れる。
- 「認可された懺悔の祈り」をここで、あるいは諸祈禱の中で用いてもよい。
- 詩編95編、キリエ、グロリア、聖歌、歌、応答文を用いてもよい。
- 特禱をここで、あるいは諸祈禱の中で用いる。

み言葉 (The Liturgy of the Word)

ここに含まれるのは以下のものである。

- 聖書朗読
- 詩編、または必要に応じて詩編歌
- 説教
- 「認可された信仰告白文 (Creed)」、または必要に応じて「認可された信仰宣言 (Affirmation of Faith)」

諸祈禱 (Prayers)

ここに含まれるのは以下のものである。

- 代禱 (intercession) と感謝
- 主の祈り

閉式 (Conclusion)

- 礼拝は祝福、派遣 (dismissal)、または他の礼拝的終了 (liturgical ending) によって閉じる。

この式の「認可された手引き」を見れば一層明確となるが、この式文の中心は「み言葉」の部分である。そして、「み言葉」に対する応答としての諸祈禱があり、それを序式と閉式とが導くという構造である。

しかし、この構造を実際の式文に落とし込んでいく際には、必ずしもこのような平坦な一本道と

いうイメージにはならない。*NPW*は、礼拝の構成要素 (ingredient) としてみ言葉 (word)、祈禱 (prayer)、讃美 (praise)、動き (action) の4種類を挙げており、これらの適切なバランスをとりながら、礼拝のテーマや方向性に従って式文を組み立てるようにと述べている¹²⁾。

印刷物としての式文の作成

このように考えたとき、礼拝の各構成要素に対してこれだけさまざまな選択肢がある式文を、実際の式の進行の中で祈禱書から各要素を拾い出しながら用いていくことは現実的ではない。従って、この式次第を元にして作成した式文は、ほとんどの場合必然的に、抜き刷りなどの形で何らかの印刷物を作成することが必要となる¹³⁾。

その結果、それが固定化して用いられていく可能性と、毎回使い捨てのような形で新しい式文が作成されていく可能性とが考えられる。定期的に行われる礼拝の式文を想定した場合、後者はあまりに無駄が多く現実的にはなりにくい案であろうが、一方で同じ式文を使い続けることによるパターンの硬直化は、せっかくこの式文が許している柔軟性を損なうことにもなるので、この両者について適切なバランスが必要となろう。

Mark Eareyはこの具体的な事例として、礼拝式文・礼拝カード・使い捨ての式文・週報・補助カード・OHPやデータプロジェクトの使用などを挙げており、礼拝式文については完全な式文を作成するほかに、式次第+リソース集という案も提案しており、さらにこれらに加えて期節によるバリエーションを持たせた複数の式文を用意するオプションも可能であると示唆している¹⁴⁾。

学校礼拝としての「み言葉の礼拝」

本学における学校礼拝の現状

ここで、以下の議論の準備として、本学における学校礼拝の現状を簡単にまとめておく。

本学においては、毎週1回水曜日に40分間の礼拝を行っている。現在のチャペルの収容人数が多くても200名程度であり、一方学生たちが非常によく礼拝に参加してくれる(少なくとも50%程度、平均すると60~70%程度)ため、全学で400名強の学生を収容しきれず、学年毎¹⁵⁾に2回に分けて実

施している。

この他、毎年1回の全学合同礼拝という機会を設け、これは90分間の特別礼拝を行う中でゲストスピーカーに60分程度の講話を依頼している。また、クリスマス礼拝については2004年度より体育館を会場とし、午後4時から1時間半ほどのキャンドル・サービスを行っている。この中では、学生によるページェントなども行われる。

礼拝用書としては、2005年度まで「礼拝式文・さんび歌集」という、本学で独自に作成した式文と聖歌集の合本を使用していた。一方、日本聖公会が聖歌集改訂の過渡期にあり、その動きを反映するために、2005年度と2006年度はこれに加えて「改訂古今聖歌集試用版」を使用した。2007年度より、新しく発行された「日本聖公会聖歌集」を使用し、式文としては若干の実験的要素を含めて、現状はプリントにて対応している。(この式文は、本論で述べている「み言葉の礼拝」を元に作成されている。)

2007年度現在、礼拝の順序はおおよそ以下の通りである。

聖歌
聖語 (聖書の言葉の交唱)
初めの祈り
聖書朗読
教話
聖歌
主の祈り
名古屋柳城短期大学の祈り
諸祈祷
祝祷
聖歌

礼拝奉仕者(聖書朗読・オルガニスト・サーバー・アッシャーなど)は極力学生たちの奉仕によることを原則としているが、新学期開始直後の礼拝などでは音楽担当教員の助力を依頼する場合もある。

「み言葉の礼拝」の学校礼拝における可能性

さて、我々日本におけるキリスト教主義学校の置かれた状況を考えてみると、それはキリスト教礼拝の土台としては特殊であるが、一方でこの「み言葉の礼拝」が生み出された状況との間には

多くの共通点を見いだすことができることに気づくのである。

前章において述べたとおり、UPAにおいて「み言葉の礼拝」のような礼拝形式が求められた背景は、その地域の民衆が福音に耳を傾け理解することができるように、地域文化に根ざした形の言葉やスタイルを取り入れたよりインフォーマルな形の礼拝が必要とされたことにあり、しかもその文化は地域により多種多様であるから、一律ではないバリエーションが必要とされる。その結果、礼拝は抽象的・理論的であるよりも具体的で形のあるものとなり、民衆の参加を促し、民衆の関心事を反映したものとなる。この状況は、まさしく日本のキリスト教主義学校の礼拝が置かれている状況に他ならない。

我々の学校礼拝においては、ほとんどの参加者(すなわち学生)が洗礼を受けているという意味でのキリスト者ではなく、それゆえ通常の教会の礼拝において用いられている教会特有の言葉はほとんど理解されないし、そのような式文は学生たちの普段の生活とは関係ないものとしてしか認識されない¹⁶⁾。また、入学してくる学生の気質や集団としての雰囲気などは年度によってかなり異なるし、すでに1年間本学での生活を経験している2年生と、入学して初めてキリスト教に触れた1年生とでは反応が異なるのは当然のことである。従って、この両者の集団に一律の対応を行うことは無理があるため、式文にもそのようなフレキシビリティが備わっていることが望まれるのである。

このように考えるとき、CofEがUPAにおいて新しいスタイルの礼拝を求めた状況と、我々が現代の日本という文脈における新しい学校礼拝のスタイルを求める状況とは、重ね合わさる部分が多分にあるのであり、「み言葉の礼拝」を我々の学校礼拝に応用することには大きな可能性があると言える。

具体的展開

さて、このような想定に基づき、具体的に礼拝のプランニングを行ってみたい。以下、NPWのSample Services セクションにある具体例など¹⁷⁾に従って考えてみることにする。

前提条件

- 聖餐式ではない (non-Eucharistic) 礼拝
- 礼拝時間は40分間 (ただし入退堂含む)
- 参加者は非キリスト者、若者。女性が多い (約95%)
- 進んで礼拝に参加する者の他、仕方なく、あるいは周囲につられて参加する者も相当数いる
- 全員が保育の素養を持つ学生であり、歌ったり、体を動かしたりすることが好きである
- 会場は学校のチャペルであり、礼拝専用の空間である
- 備え付けの電子オルガンを学生が演奏するほか、ギターなどの楽器も必要に応じて利用可能である
- 聖歌は基本的にチャペル備え付けの「日本聖公会聖歌集」を用いるほか、必要に応じてプリントを配布する。また、オルガニストの技量や練習時間などから、3曲以上の聖歌の伴奏を依頼することは難しい
- 週報の作成は工数的に不可能である

礼拝のテーマと方向性

- 全学生が集まるということを通して、キャンパス全体に共同体としての意味を与える
- 週の半ばに行われる礼拝を通し、一週間という時の神聖さを認識する
- 実習等で不在の学生がいる場合、礼拝を通してそれらの学生を共同体の一員として覚える
- 直近の学校行事等 (学園祭、実習など) を踏まえて、そのために祈る機会となる
- 学校生活において不安や悩みを持つ学生が慰めを得ることができる
- 現代社会の中に生きるわたしたち、という要素も意識する
- その他折に触れ、主要な教会暦 (降臨節・降誕節・大齋節・復活節など) を礼拝の中で生かし、年間というサイクルの中での時の神聖さを認識する

方針

- 礼拝場所がチャペルというキリスト教特有の場所であり、キリスト教主義学校の礼拝であ

ることをも鑑みて、キリスト教礼拝であるというアイデンティティを明確にする

- また、本学の礼拝のアイデンティティとして、主の祈りと「名古屋柳城短期大学のための祈り」は毎回必ず用いることとする
- ただし、祈りの言葉については通常の教会での用語法にこだわらず、学生たちに違和感のない言葉を探す努力をする
- キリスト者でない学生たちの礼拝であることから、信仰告白・信仰宣言は用いない
- 学生たちの参加を促す意味で、対話的な要素や歌う要素などを積極的に取り入れる
- 1年間の礼拝がパターンリズムに陥らぬようバリエーションを用意する一方で、各学期15回程程度の礼拝回数であることも考え、目まぐるしい印象にならないよう適度な範囲に押さえることも考慮する

式文の具体例

以上の考察を元にして作成した、具体的な式文のサンプルを以下に示す。なお、この式文は2007年度の本学礼拝で使用しているものを元にし、一部変更を加えたものである。

前奏 (一同黙祷する)

序式

聖歌

聖語

司式者 愛によって互いに仕えなさい。(ガラテヤ 5:13)

会衆 神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってください。(1ヨハネ 4:16)

初めの祈り

司式者 愛する神よ、わたしたちは共に祈るため、今ここに集まりました。

会衆 心から祈り、喜びの心で歌い、そしてあなたの言葉に耳を傾けることができるように、どうかわたしたちを導いてください。わたしたちの主、イエス・キリストによって。アーメン

特祷・その他の祈り

(司式者は、この日の主題に沿った特祷を祈る。または、それに代えて、あるいはそれに加えて、適切な感謝・懺悔と赦しの祈りなどを用いる)

み言葉

聖書朗読

教話

聖歌

祈り

主の祈り

名古屋柳城短期大学のための祈り

一同 全能の神よ、わたしたちはただ主の賜物によってまことの知恵を得ることができます。どうか、み名によって建てられた名古屋柳城短期大学に恵みを下し、教える者と学ぶ者を祝福して、共に知識を深め、主の真理を悟り、愛をもって互いに仕え、謙遜な心で唯一の神を仰ぐことができますようにしてください。主イエス・キリストによってお願いいたします
アーメン

折々の祈り

(この学院のため、世界のため、困難の中にある人を覚えて共に祈る。または適切な感謝などを用いる)

祝祷

聖歌

後奏 (一同黙祷する)

文化的要素

本章の最後に、式文には表現しにくい、文化的要素を取り入れることについて付言する。

既述のように、CofE が UPA においてこのスタイルを選んだ大きな理由の一つは、地域文化を礼拝に取り入れるためのフレキシビリティを必要としたからであり、かつそれによってより具体的で形のある礼拝を作り出すことが求められたのである。本学の学生たちについても同様のことが言える。彼らは、通常の教会員から見ればいくつかの点で大きく異なる、独自の文化を持った存在と見るべきであり、彼ら自身の文化を尊重しながら礼

拝を作り上げることで、礼拝は彼らにとってより具体的なものとなり、彼ら自身の関心から礼拝が遊離することなく、参加を促すことができる。

現時点で本学の礼拝の中で行っているこれらの工夫には、以下のようなものがある。

- 学生オルガニストには自由に前奏・後奏の曲を選ばせているが、その際に大きな自由度を認めている。この結果、童謡をゆっくりと演奏するような学生もいれば、ポピュラーソングをアレンジした譜面を演奏する学生もいる。通常の教会の礼拝で同じことを行えばかなりの違和感があるであろうが、礼拝に参加する学生たちにとってはある面自然に、またある面新鮮に受けとめられているようである。またオルガニストにとっても、多忙なスケジュールの中で練習の負担を減らすという点でも、好きな曲を自由に選んで演奏できるという点でも、演奏のモチベーションにつながっている。
- 年に数回、学生たちは一斉に実習に出て行き、2週間から3週間の間それぞれの実習先で離れ離れに生活する。その実習後の礼拝は、彼らにとっての貴重な「リユニオン」の時なのである。実際、実習直後の礼拝は私語が大変多く、普通の方法ではなかなか司式者に注意を引きつけられない。このような時に、礼拝をまず相互のあいさつから始め、続いて実習を無事に終えた感謝の祈りを全員で唱えることは、上記の式文における「序式」の文化的適合と見ることもできるであろう。
- 保育科の学生ということもあり、学生たちはクラスでまとまってパフォーマンスをしたり、一緒に歌ったりということが大変に好きである。内容にもよるが、機会を見つけてこれらのパフォーマンスなどを礼拝の中で披露してもらおうよう心がけている。特に、クリスマス礼拝の際などにはダンスサークルがダンスを披露したりすることが定期的に行われるようになった。その他、手話を取り入れた聖歌なども用いている。
- 礼拝の中で歌う歌は、必ずしも聖歌集のものによらず、学生たちになじみのあるものを積極的に選んでいる。例を挙げれば、「ともだ

ちになるために」「ビリーブ」などは毎年数回礼拝で用いている。

- その他、全学生が集まる機会であることを利用し、学生会やサークル・ボランティアの案内などをさせて欲しいという希望が来ることもあるが、これらは通常の教会における礼拝後の報告に相当するものでもあり、事情と時間の許す限りなるべく受け入れるようにしている。

今後の予定

今年度の後期に、礼拝にバリエーションを持たせるための構成要素のいくつかを実際に礼拝で用いて、学生の反応を確かめた上で用いることとして思い込んでいる。特に、学校生活の中で生じるさまざまなニーズに応じた諸祈禱をリソースとして用意していきたいと考えている。

最終的には、本学で用いる礼拝用小冊子の形にまとめることが目標であるが、当面はプリント対応を中心とし、なるべくフレキシビリティを失わないようにして様々な試みを続けていきたい。

おわりに

以上、「み言葉の礼拝¹⁸⁾」をもとに大学礼拝の式文を作成するという、本学における大学礼拝の一つの試みについて、まだ不完全なものではあるが経過報告を兼ねてまとめてみた。

日本という地でキリスト教礼拝を考える際、とかく忘れがちなのが「文化」という観点である。学校礼拝の主たる参加者である学生たちを、通常の教会員とは異なる文化のキャリアであるという観点から見たとき、CofE が UPA に対して特別な対応の必要性を見いだしたのと同じ状況がそこに出現していることは、大学礼拝について考える新たな視座を与えるものであると筆者は考える。その意味で、礼拝の企画や実施に関しても学生のより積極的な参加を得ることができるよう、働きかけていきたいと考えている。

そしてこの問題にこの点から取り組んでいくとき、これは日本という地におけるキリスト教宣教についても大きなうながしとなるのではないかと期待している。このままではこれからの教会はどうなるのか、という声を聞くことは多い。しか

し、少なくとも本学の大学礼拝においては、毎週数百名の若者がチャペルに集い、福音のメッセージに耳を傾けているのである。この彼らを、従来のスタイルの教会に引きずり込もうとするのではなく、彼らの文化を尊重し、彼らを包み込むことができるように、教会がその姿を変えなければならないと切実に思う。J. G. デーヴィス以来強く叫ばれている、礼拝と宣教が一体となった教会の姿は、今まさに筆者の目の前にあるというのが実感である。

【注】

- 1) 拙著「キリスト教主義学校における礼拝の意味:『キリスト教主義の学校』を教会たらしめる営み」名古屋柳城短期大学研究紀要第27号、2005年、145-152頁。
- 2) 同時に、往々にしてこのような試みは「文化的洗脳」の色彩を帯びていたことも記憶すべきであろう。
- 3) このような模索は英国教会に限ったことではないが、本論では英国教会の事例の紹介のみにとどめる。
- 4) Anne Dawtry and Caryoly Headley, 'A Service of the Word', *A Companion to Common Worship* Volume I, SPCK, 2001, pp. 52-84.
- 5) 後述の Faith in the City の定義によれば、UPA とは重要な 3 つの苦難、すなわち経済的低迷、物理的崩壊、社会的離散によって特別な不利益を被っている地域であり、典型的には廃れた産業に関係する古い港や製造業地域で、具体的な欠乏状況を示す指標としては失業・老人の独居・単親家庭・民族性(移住者)・過密な住居・基本的設備を欠く住居が挙げられている。The Archbishop of Canterbury's Commission on Urban Priority Areas, *Faith in the City*, Church House Publishing, 1985. (On-line Version can be accessed at <http://www.cofe.anglican.org/info/socialpublic/fitctitlepage.html>; accessed on October 17, 2006.), 1.17-1.21.
- 6) Trevor Lloyd, *A Service of the Word* (Grove Worship Series 151), Grove Books Limited,

- 1999, pp. 4-5. (以下、本節の議論は基本的に Lloyd に基づくものである)
- 7) *Faith in the City*, 6.99-6.113.
 - 8) Anne Barton, *All-Age Worship* (Grove Worship Series 126), Grove Books Limited, 1993, pp. 6-9,
 - 9) Church of England, *Patterns For Worship: A Report by the Liturgical Commission of the General Synod of the Church of England*, Church House Publishing, 1989.
 - 10) Church of England, *Common Worship*, Church House Publishing, 2000, pp. 21-27.
 - 11) 「み言葉の礼拝」は、文字通りみ言葉の礼拝として用いる場合と、聖餐と組み合わせて用いる場合とで2種類の式文が挙げられているが、本稿においては前者のみを扱う。
 - 12) Church of England, *New Patterns For Worship*, Church House Publishing, 2002, pp. 15-20..
 - 13) この助けとして、例えば以下のようなガイドブックが用意されている。Mark Earey, *Producing Your Own Orders of Service*, Church House Publishing, 2000.
 - 14) *Ibid.* pp. 7-16.
 - 15) 専攻科の学生は人数が多くないこともあり、2回のうち前半の礼拝に参加するようにしている。
 - 16) ここで筆者は、礼拝を日常の言葉そのもので行うということを主張しているわけではない。礼拝が礼拝である以上、ある部分では日常生活と異なった雰囲気を持つことも重要である。ただし、それが行き過ぎると参加者の学生たちは「日常生活とは関係ない」という認識を持つに至り、そのような礼拝は彼らの目にある種の「伝統芸能」としてしか映らないであろう。
 - 17) *New Patterns for Worship*, pp. 15-38, 322-478.
 - 18) 日本聖公会においても徐々に広まりつつある「み言葉の礼拝」について、本論では触れていない。この式文は、本論が考察の対象とした CofE の A Service of the Word などを元に作成されているが、そもそもの意図が聖職不在の主日礼拝を行うためというところにあり、かなり意図的に従来の聖餐式文の構成要素をそのまま用いている。また、式文上選択可能なオプションもそれほど多くはなく、本論がこの礼拝形式の特徴として挙げた、構造中心のアプローチは包み隠されている。このような点で、本論とこの式文とは目指すところを異にするものであり、今回は特に言及しなかったことを付記する。

A Service of the Word as a School Service

Ichihara, Shintaro David*

The importance of school services at Christian schools in Japan is that the services make the schools in communion with the Church universal, and this is the meaning of non-Christian students¹ participation in Christian services. On the other hand, most of the students of these Christian schools are non-Christians who belong to the younger generation, and they have different cultural characteristics from ordinary churchgoers. Therefore, we need to find a new style of worship for the services in Christian schools in Japan, accommodating these two ambivalent requirements.

The Church of England introduced “A Service of the Word” to satisfy practical needs of its mission works. One of these is the search for the ministry in Urban Priority Areas, and the other is the need for a new liturgy for all-age worship.

These situations in the Church of England have many similarities with the school services of the Christian schools in Japan. There is a need for a new liturgy which is based on both local cultures and styles, and that is more concrete and tangible.

Based on this philosophy, we designed a new style of liturgy making use of “A Service of the Word” as its structure, and we are now in the process of trial and evaluation.

キーワード: 学校礼拝 (*school service*), み言葉の礼拝 (*service of the word*)